

〔論 説〕

「雪どけ」とソ連の歴史学 —1953-56 年の『歴史の諸問題』誌の活動—

立 石 洋 子

はじめに

ソ連解体後のロシアでは、ソ連時代の過去といかに向き合うのかという問題が常に人々の関心を集めてきた。なかでも 1956 年のスターリンの「個人崇拜」批判に象徴される「雪どけ」と呼ばれたスターリン死後の政治、経済の改革と社会の変化は、1980 年代後半に始まったペレストロイカ期の議論を受け継ぎながら、政治や社会の現状と結び付けられ、論争を招いてきた¹。

この時期のソ連を分析した近年の研究の特徴の一つは、スターリンの「個人崇拜」批判の内容の多義性と、その解釈をめぐる知識人の論争に焦点を当てる点にある。例えば作家や文学者、歴史家の議論を分析したジョーンズは、スターリン死後の党指導部には保守主義と急進的な改革への志向が共存しており、党指導部はスターリン期の一貫した評価を国民に提示できず、知識人と党指導部の「交渉」と「競合」によって非スターリン化が展開したと述べる²。党指導部による改革と知識人の議論の相互作用は、ソヴィエト社会に、それ以前には存在しなかった公共空間と「世

1 Denis Kozlov, "Writing about the Thaw in Post-Soviet Russia," *Russian Studies in History*, vol. 49, no. 3, Spring 2011, pp. 4-6.

2 Polly Jones, "Introduction: The dilemmas of de-Stalinization," in Polly Jones ed., *The dilemmas of de-Stalinization: negotiating cultural and social change in the Khrushchev era*, Routledge, 2006, pp. 1-18.

論」を生み出したという指摘もある³。

本稿はこれらの研究が指摘する知識人と党指導部の「交渉」と公共空間の出現という現象を分析するために、歴史家の議論に焦点を当てる。ソ連において歴史像は体制の正統性を示し、国民を統合する手段として常に重視されてきた。特に「雪どけ」期の過去の見直しは、スターリン期に政治的抑圧を受けた人々の名誉回復とも結びつき、政治改革の中心的論点となった。こうしてスターリン死後の歴史の再検討が政治改革をめぐる論争と緊密に結び付くなか、その中心となったのが学術誌『歴史の諸問題』であった。

党指導者たちや古参ボリシェヴィキとも協力しながら歴史の見直しを進めた同誌の活動は、内外の多くの研究者の注目を集めており、特に党中央委員会が1957年3月に同誌を批判し、編集部を交代させたことがよく知られている⁴。この理由については、党指導部が同誌の活動を政治的権威への挑戦とみなしたことや⁵、党指導者たちの権力闘争⁶、1956年の夏から秋の東欧での政治変動と国内での体制批判の高まりが、同誌に関する党指導部の政策を変化させたといった要因が指摘されている⁷。

本稿は党指導部の決定採択以前に、同誌への批判が歴史家や市民からも提起されていたことに着目し、歴史家、市民の反応も含めて同誌の活動を分析することを課題とする。ジョーンズはモスクワ大学共産党史講座の歴史家が同誌に向けた批判に言及しているが⁸、その他の歴史家たちの議論

3 Karl E. Loewenstein, "Re-emergence of public opinion in the Soviet Union: Khrushchev and responses to the secret speech," *Europe-Asia Studies*, 58:8, 2006, p. 1343, Karl Loewenstein, "Obshchestvennost' as Key to Understanding Soviet Writers of the 1950s: "Moskovskii Literator"," October 1956-March 1957, *Journal of Contemporary History*, Vol. 44, No. 3, Jul., 2009, pp. 473-92.

4 和田春樹「スターリン批判:1953-56」東京大学社会科学研究所編『現代社会主義 その多元的諸相』東京大学出版会、1977年。

5 Roger D. Markwick, "Thaws and Freezes in Soviet Historiography, 1953-64," in Jones ed., *The Dilemmas of De-Stalinization*, p. 176.

6 A. B. Савельев. Номенкратурная борьба вокруг журнала "Вопросы истории" в 1954-1957 годах // Отечественная история (ОИ). №5. 2003. С. 148-62.

7 和田春樹『スターリン批判 1953～56年: 一人の独裁者の死が、いかに20世紀世界を揺り動かしたか』作品社、2016年、Polly Jones, *Myth, Memory, Trauma: Rethinking the Stalinist Past in the Soviet Union, 1953-70*, Yale University Press, 2013, Ch.2.

はいまだ明らかにされていない。また先行研究の多くは副編集長 E. H. ブルジャーロフの活動とそれに対する党の批判に焦点を当てており、編集長 A. M. パンクラートヴァや他の編集員の活動、その他の歴史家や読者の同誌への反応は注目されてこなかった。

そこで本稿は、科学アカデミーの一次資料などを用いて 1953 年から 1956 年の同誌編集部活動を分析するとともに、党指導部だけでなく歴史家や読者の反応を明らかにすることにより、スターリン死後の政治的・社会的変動の時代における知識人と政治の相互作用の新たな一側面を解明することを目標とした。

「雪どけ」とソ連の歴史家たち

1953 年 3 月のスターリンの死は、歴史家を含む多くの知識人にとって重大な転機となった。ソ連科学アカデミー歴史研究所長 A. И. シードロフは 3 月下旬に『歴史の諸問題』誌編集部の再編をソ連共産党中央委員会に提案し、編集長にパンクラートヴァを、副編集長にブルジャーロフを推薦した⁹。この提案は党中央委員会と科学アカデミー理事会の公式決定として採択された¹⁰。

新たに編集長に就任したパンクラートヴァは、1897 年にオデッサの労働者の家庭に生まれ、1917 年にエスエル（社会革命党）に、1919 年に共産党に入党した後、ソ連のマルクス主義史学の創始者である M. H. ポクロフスキーの下で学んだ。彼女はスターリン期を代表する党員歴史家であったが、1920 代には同じ歴史家の夫が「トロツキー主義者」として逮捕され、1936 年には政治的抑圧を受けた歴史家を擁護したという理由で党から除名されている。さらに 1930 年代後半には師のポクロフスキーが党指導部の批判を受けた。こうした危機に直面するたびに彼女は党の方針を受け入れて自説を修正し、1952 年にはソ連共産党中央委員に、1953 年には

8 Jones, *Myth, Memory, Trauma*, Ch.2.

9 Российский государственный архив новейшей истории (РГАНИ). Ф. 5. Оп. 17. Д. 426. Л. 6.

10 党中央委員会と科学アカデミー理事会の決定は 6 月 3 日と 5 日にそれぞれ採択された。РГАНИ. Ф. 5. Оп. 17. Д. 426. ЛЛ. 7, 28-30, Архив Российской Академии Наук (Архив РАН). Ф. 1604. Оп. 3. Д. 54. ЛЛ. 1-2, Ф. 697. Оп. 1. Д. 135. ЛЛ. 143-4.

女性の歴史家としてロシア・ソ連の歴史を通じて初めて科学アカデミー会員に選出された。これに加えて、1954年には最高会議代議員にも選出されている¹¹。

『イズヴェスチヤ』紙が掲載した党中央委員候補者のリストにパンクラートヴァの名前を見つけたモスクワ大学の歴史家B. T. クルトは、その選出に反対する書簡を党中央委員会学術文化部に送り、その理由に党からの除名歴やスターリン期に政治的批判を受けた人物との関係、すでに10の職務に就いていることなどを上げている。しかし、この手紙を調査した党中央委員会学術文化部長A. M. ルミャンツェフは中央委員会書記П. H. ポスペロフに宛てて、彼女が政治的に問題のある歴史家を擁護して軽率な発言をすることがあるのは確かだとしながらも、他の歴史家は彼女の選出には反対していないと報告し、彼女にクルトの書簡を見せて、より慎重に行動し、職務を減らすように指示することを提案した¹²。これらの書簡と報告は、パンクラートヴァに対する党指導部と他の歴史家たちの印象を少なからず反映していたと思われる¹³。

彼女とともに新たな編集部の活動を牽引したのは副編集長に就任したブルジャーロフであった。1906年にアストラハンのアルメニア人労働者の家庭に生まれたブルジャーロフは14歳の時（1920年）にバクーに移住し、その後、バクー・コムソモールの指導者の一人になった。1930年代以降歴史研究に携わり、1938年にはバクー・コミッサールに関する初のモノグラフを出版した。スターリン時代には党中央委員会に付属する党高党学校や党中央委員会付属社会科学アカデミー、党中央委員会宣伝扇動部の講師として働き、スターリンが死去した際には、党中央委員会の理論誌『コムニスト』誌や『歴史の諸問題』誌にスターリンに関する解説文を執

11 立石洋子 「『雪どけ』と歴史学—A. M.パンクラートヴァの活動を中心に—」中嶋毅編『新史料で読むロシア史』山川出版社、2013年参照。

12 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 17, Д. 425, ЛЛ. 261–7, 269–70.

13 Л. А. Сидорова. Анна Михайловна Панкратова (1897-1957) // А. А. Чернобаев (ред.) Истории России. Биографии. Москва, 2001. С. 685-90, Reginald E. Zelnik, *Perils of Pankratova: Some Stories from the Annals of Soviet Historiography*, University of Washington Press, 2005, pp. 12-80, Савельев. Номенкратурная борьба. С. 151-2, 立石洋子 「『雪解け』と歴史学—A. M.パンクラートヴァの活動を中心に」中嶋毅編『新史料で読むロシア史』山川出版、2013年、207-8頁。

筆している。つまり歴史学の「雪どけ」は、パンクラートヴァとブルジャーロフ、そして二人を編集員に推薦したシードロフというスターリン期を代表する党員歴史家たちによって始まったといえる¹⁴。

『歴史の諸問題』誌新編集部の活動の始まり

1956年3月に再編された『歴史の諸問題』誌編集部には当初、ソ連史、革命前ロシアの歴史、世界史の3部門が置かれ、20人の編集員が在籍していた。その人選は編集長の特権であり、なかにはスターリン期に体制への政治的忠誠を疑われて抑圧を受け、スターリン死後に名誉回復された人物も含まれた。同誌はソ連科学アカデミー歴史研究所が刊行していたが、編集室は共産党が出版する『ブラウダ』紙の建物の6階に割り当てられていた¹⁵。

ブルジャーロフの回想によれば、新編集部の初の編集会議が開かれたのは1953年5月末であった。その時点で同年の6号はすでに完成し、印刷を待つだけの状態になっていたが、編集部はこれを一から作り直すことを決めた¹⁶。7月の科学アカデミー歴史研究所会議で報告したパンクラートヴァによれば、当時最も重要なテーマだと考えられた現代史やソ連の社会史をテーマとする投稿が不足しており、最近の学位論文を掲載せざるを得なかった。これはおそらく、スターリン晩年の歴史研究への政治的統制の強まりを受けて、歴史家たちが政治的介入の可能性の高い分野での投稿を回避したためだと思われる。彼女によれば、次の3号分については出版できるか否かすら定かではなかった。編集部はモスクワの大学や科学アカデミーの研究所の責任者を招くとともに、各民族共和国の研究機関には書簡を送って研究計画や関心のあるテーマを尋ね、同誌のために特別に担当者を置くことを要請した。ほぼすべての編集員が資料や原稿、助言、援助を

14 和田春樹「エドゥアルド・ブルジャーロフ」『ロシア史研究』43号、59-61頁、1986年、和田「スターリン批判」、29頁、*E. H. Городецкий*. Журнал “Вопросы истории” в середине 50-х годов // Вопросы истории (ВИ). №9. 1989. С. 69, *Александр Кан*. Анна Панкратова и “Вопросы истории.” Новаторский и критический исторический журнал в советском союзе в 1950-е году // Кукушкин Ю. С. (отв. ред). Историк и время : 20 - 50-е году XX века: А. М. Панкратова. Москва, 2000. С. 87, 90.

15 *Кан*. Анна Панкратова. С. 88-9.

16 *Городецкий*. Журнал “Вопросы истории.” С. 70.

求めて各地へ出向き、雑誌の活動を説明して協力を依頼した。エストニアやラトヴィア、ウクライナ、ベラルーシ、ウズベキスタン、アゼルバイジャンなどの共和国では学術会議に出席し、各地で読者会議を開催した¹⁷。

第二次大戦後、軍事史の分野を除いて歴史学全般を扱う唯一の学術誌になったことも、同誌の活動を困難にした。編集部の活動を議論した科学アカデミー歴史研究所会議で歴史家B. K. ヤツンスキーは、個別テーマと基本的かつ全体的なテーマの両方を議論することは不可能であり、同誌は後者に集中すべきだと主張したが、ソ連史への社会的関心の高まりのなかで、歴史家や教師、一般の読者の関心に一冊の雑誌でいかに応えるのかという問題は、編集部の大きな負担となっていた¹⁸。

編集員のK. Л. セレズネフによれば、こうした困難な状況にもかかわらず、パンクラトヴァとブルジャーロフは雑誌を「歴史戦線の組織者」にしようと試みた。「編集部の質素な部屋はまるで学術サークルのよう」であり、そこであらゆる書籍や論文、書評を熱心に議論したとセレズネフは回想している¹⁹。編集部会議でパンクラトヴァは、雑誌の活動が「一方通行」にならないように、同僚たちに「不同意を示す場所」を提供しなければならないと主張した。また科学アカデミー歴史研究所会議では、歴史家に議論の場を提供するとともに、雑誌が彼らに断定的な回答を示すことを防ぐために、「議論と熟考」セクションを改善することも報告している。編集部会議ではブルジャーロフも、歴史学を「党の武器」とすることは、同誌が「教条的組織」になることを意味してはいないと発言した。また編集員P. K. フォルトゥナトフは、スターリンの晩年に自由な議論が困難となっていた中央アジア諸民族の対ロシア反乱を再検討すべきだと主張し、

17 Архив РАН. Ф. 1577. Оп. 2. Д. 311. ЛЛ. 4-7, 15 -6, Д. 333. ЛЛ. 49, 54, Ф. 697. Оп. 2. Д. 67. Л.8

18 Архив РАН. Ф. 1577. Оп. 2. Д. 333. ЛЛ. 74 -5. 後に投稿数が増加すると、半年から1年以上編集部または査読者の元にとどめ置かれる原稿が増え、投稿者の不満を生んだ。パンクラトヴァは党中央委員会に一般の読者を対象とした歴史雑誌、共産党史など特定のテーマを扱う雑誌、民族共和国の歴史雑誌の創刊を提案したが、これは『共産党史の諸問題』誌の創刊などによって部分的に実現した。Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 64. Л. 1, Д. 67. ЛЛ. 2, 13.

19 К. Л. Селезнев. Страсный борец за линию партии // Женщины-революционеры и ученые. Москва, 1982. С. 41.

民族運動を十把一絡げに反動とみなす「無差別のアプローチ」は許されないと、この問題の再検討を援助すべきだと主張した²⁰。

新編集部が初めて出版した 1953 年 6 号は巻頭論文で「創造的議論」の重要性を強調し、学術の発展には論争的な問題について意見を闘わせることが必要だと訴えた²¹。中央アジアだけでなく、19 世紀の北カフカース諸民族の対ロシア蜂起や 1905 年革命、第二次世界大戦など、スターリン期に公式史観が政治的に強要されたテーマについて歴史家の議論の再開を促すことを編集部は特に重視した。

『歴史の諸問題』誌への読者と当局の反応

『歴史の諸問題』誌の実験は読者の反響を呼んだ。編集部への手紙は 1953 年には 624 通、1954 年には 945 通、1955 年には 1085 通にのぼり、編集部は読者との結びつきをより強めるために新たに「読者の手紙と注釈」セクションを誌上に設けた²²。投稿数は 1952 年の 494 から 1953 年には 535、1954 年には 921、55 年には 1201 へと増加し、掲載論文数も 1953 年の 266 から 1954 年には 326、1955 年には 443 となった。出版部数は 1953 年の 4000 部から 1956 年には 6 万部へと増大し、編集部内の部門も共産党史、ソヴィエト社会の歴史、ソ連史、世界史、人民民主主義諸国の歴史、ソ連史研究に関する批評と書評、世界史研究に関する批評と書評の 6 部門へと増加した²³。

投稿のなかには、スターリン期の公式見解を再検討しようとするものも現れた。例えばモスクワの学校教師 A. ピクマンは、19 世紀の北カフカースで起こった山岳諸民族の対ロシア蜂起を再検討した論文を投稿した²⁴。編集部はこの論文を「議論と熟考」セクションに掲載したうえで論文の末

20 Архив РАН. Ф. 1577. Оп. 2. Д. 333. ЛЛ. 55-6, 103-7, Ф. 697. Оп.2. Д. 63. Л. 6, Д. 72. Л. 154.

21 О некоторых важнейших задачах советских историков // ВИ. №6. 1953. С.11.

22 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 67. Л. 8, Ф. 697. Оп. 2. Д. 63. Л. 8, Д. 72. Л. 1.

23 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 61. ЛЛ. 1-2, Д. 72. Л. 1, Конференция читателей журнала “Вопросы истории” // ВИ. № 1. 1956. С. 200, Кан. Анна Панкратова. С. 88-9.

24 Yoko Tateishi, “Reframing the “History of the USSR”: The “Thaw” and Changes in the Portrayal of Shamil’s rebellion in Nineteenth-century North Caucasus,” *Acta Slavica Iaponica*, 34, 2014, pp. 95-114.

尾に注釈を付けて、1956年1月末の読者会議（後述）でこの問題について他の読者からも議論が提起されたことを紹介し、非ロシア諸民族の民族運動に関する議論を呼びかけた²⁵。1955年5号は巻頭論文で第二次世界大戦と独ソ戦の再検討の必要性を訴え、これまでの研究が戦争初期のソ連軍の劣勢や、銃後の人々と軍の指導者たちの貢献にほとんど言及してこなかったことを批判し、一次史料を広く公開し、戦争を体験した人々の回想録を出版すべきだと主張した²⁶。1956年5号には科学アカデミーの編集で1955年に出版された第二次世界大戦に関する論集の書評を掲載し、本書は国際関係や外交政策、銃後の生活の描写が不十分であり、同盟国との協力の意義を過小評価していると批判した²⁷。

1955年には1905年革命50周年を記念して、関連論文が多数掲載された。ブルジャーロフが執筆した同年1号の巻頭論文は、ペテルブルグ・ソヴィエトにおけるメンシェヴィキとトロツキーの役割をより具体的に分析すべきだと主張し、ボリシェヴィキがメンシェヴィキやエスエルと統一戦線を作ろうとしたことを強調した²⁸。ボリシェヴィキ内部の見解の差異や、メンシェヴィキとエスエルの活動、スターリンと対立して失脚したトロツキーやブハーリン、カーメネフらの役割を再検討すべきだという主張は雑誌上や読者会議の場で繰り返し表明され、注目を集めた²⁹。

この主張は他の歴史家にも支持され、11号にはペテルブルク・ソヴィエトにおけるメンシェヴィキの役割を再評価したレニングラード州党委員会付属党学校歴史講座長Л. Ф. Петроваの論文が掲載された³⁰。また同

25 А. Пикман. О борьбе Кавказских горцев с царскими колонизаторами // ВИ. №3. 1956. С. 75-84.

26 О разработке истории Великой Отечественной войны Советского Союза // ВИ. №5. 1955. С. 3-8.

27 Б. Болтин, А. С. Филиппов. Серьезные недостатки “Очерки истории Великой Отечественной войны” // ВИ. №5. 1956. С. 146-56.

28 За глубокое изучение истории первой русской революции // ВИ. №1. 1955. С. 3-10.

29 Городецкий. Журнал “Вопросы истории.” С. 72.

30 Центральный государственный архив историко-политических документов Санкт-Петербурга (ЦГАИПД СПб). Ф. 4768. Оп. 22. Д. 433. Л. 14, РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 23. Л. 21, Л. Ф. Петрова. Петербургский совет рабочих депутатов в 1905 году // ВИ. №11. 1955. С. 25-40.

年 12 号が掲載した H. H. ヤコヴレフ論文は、1905 年 12 月にモスクワで起こった武装蜂起を検討し、当時ボリシェヴィキは労働者階級の政党を統一するために、メンシェヴィキとの合意を目指したと主張した³¹。さらに 1956 年 8 号に共産党史の教材として掲載されたモスカレエフ論文は、ロシア社会民主労働党の結党時には統一的な党組織や綱領は存在しなかったことを示し、スターリン期には語られなかった党内の対立を描いた³²。

これに対して党中央委員会学術部顧問 П. В. ヴォロブエフは、同じ顧問の А. С. チェルニャエフとともにブルジャーロフの 1905 年革命の解釈を批判し、同誌は「学術の党派性の原則から逸脱し」ているとして、その活動を審議する会議を開くべきだと党中央委員会に訴えた³³。しかし、会議は当日に突然中止され、来場した 60 人の出席者は党中央委員会の建物の入り口で初めて中止を知ったという³⁴。学術文化部長であったルミャンツェフは後に回想で、彼自身が会議の中止を決めたこと述べているが、この背景には同誌への党指導部の支持があったようである。

ヴォロブエフらの批判に対してパンクラトヴァは、反論をフルシチョフら党中央委員会書記に繰り返し送付していた³⁵。初めて学術文化部を批判した彼女の 1955 年 5 月の報告には、党中央委員会書記 Д. Т. シェピーロフ、ポスペロフにこの問題を審議するように求めたフルシチョフの書き込みと、フルシチョフの指示で報告の写しがすべての党中央委員会書記に送られたという別の人物の書き込みが残されており、彼女の反論がフルシチョフら党指導者たちに支持された可能性が高い³⁶。これに対してヴォロブエフはフルシチョフや党中央委員会書記 М. А. スースロフらに報告を送り、会議の中止を決定したルミャンツェフの「不誠実さ」を批判した。最も許容し難かったのは、ルミャンツェフが彼に対して、「君はパンクラ

31 Н. Н. Яковлев. Московские вольшевики во главе декабрьского вооруженного восстания 1905 года // ВИ. №12. 1955. С. 3-18.

32 М. А. Москалеев. Борьба за создание марксистской рабочей партии в 90-х годах XIX века // ВИ. №8. 1956.

33 Савельев. Номенклатурная борьба. С. 150.

34 РГНИ. Ф. 5. Оп. 17. Д. 505. Л. 29.

35 Г. В. Старушенко (ред.) Наука и власть. Воспоминания ученых - гуманитариев и обществоведов. Москва, 2001. С. 171, Кукушкин (отв. ред). Историк и время. С. 247-249.

36 Савельев. Номенклатурная борьба. С. 154.

トヴァと対立しているということを理解しているのか？ 彼女は党中央委員でソ連最高会議代議員だ。カンマリなどではない、パンクラートヴァなんだ！」と繰り返し語ったことだという³⁷。

ヴォロブエフとチェルニャエフはその後も同誌を批判する報告を提出し続けた。しかし、1955年9月に学術文化部が学術・高等教育機関部に改組されると（翌年5月には学術・高等教育機関・学校部に改組）、ルミャンツェフは党の理論誌『コムニスト』誌編集長へ異動し、ヴォロブエフは科学アカデミー歴史研究所へと移った。学術・高等教育機関部長に就任したB. キリリンは、『歴史の諸問題』誌に関するヴォロブエフ報告の調査は終了したという結論を1955年11月に党中央委員会に提出している³⁸。この事例が示すように、「雪どけ」初期には、パンクラートヴァはその地位を利用してブルジャーロフと編集部活動を擁護することができたのである³⁹。

しかし、雑誌への注目が高まるにつれて、編集部はより大きな政治的・社会的圧力の下に置かれるようになっていった。編集員のH. M. ドゥルジーニンが1955年2月にパンクラートヴァに手紙を送り、「編集部活動は困難になっています。委員はより大きな身体的、道徳的強さを求められています」と述べて辞職を願い出た⁴⁰。その後の編集部活動が引き起こした論争を考慮すれば、この手紙は歴史への社会的関心の高まりのなかで、唯一の学術誌として「歴史戦線」を率いることがもたらす重圧を示しているように思われる。

「学術共同体」の擁護者としての学術誌と議論の場の創出

ブルジャーロフは『歴史の諸問題』誌編集部の会議で、共産党の理論誌

37 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 17. Д. 505. ЛЛ. 25-31, Интервью с академиком Павлом Валильевичем Волобуевым // Г. Н. Севостьянов (ред.) Академик П. В. Волобуев: Неопубликованные работы, воспоминания, статьи. Москва, 2000. С. 27. М. Д. Канマリは当時『哲学の諸問題』誌の編集長だった。

38 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 17. Д. 11. Л. 83.

39 同誌は1955年から「メンシェヴィキを正当化」しようとする『歴史の諸問題』誌の「不健康な論調」を把握していたが、同誌への批判はたびたび削除されたという。Центр хранения документов общественно-политической истории Москвы (ЦХДОПИМ). Ф. 3273. Оп. 1. Д. 6. Л. 105.

40 Архив РАН. Ф. 1604. Оп. 3. Д. 54. ЛЛ. 5-6.

『コムニスト』誌は「新たな潮流を感じ取っていない」と述べて、同誌が重要な問題を議論し始める可能性はないと発言したことがあった⁴¹。しかし、実際にはスターリンの死後、『コムニスト』誌編集部も第20回党大会を待たずに雑誌の改善を試みていた。すでに1954年4月の編集部会議では、同誌の「多くの紋切り型」、テーマの「非創造性」が問題視され、多くの論文が同じような結論から始まっているという批判が提起された。これに対しては、党中央委員会の雑誌である『コムニスト』誌に「論争的な論文を掲載する必要はない、そのために他の雑誌が存在している」という反論も提起されたが、1956年2月の同誌の編集部会議では、再び「雑誌は「ペレストロイカ（再建）」の時期にある」という発言が聞かれ、その「教条主義、決まり文句と偏見に満ちたスタイル」が批判された。さらに読者の見解を知るために読者会議を開催し、工場や研究機関を訪問すべきだという提案もなされた。

この会議で編集員の一人ブルラツキーは、同誌の「批判と書評」セクションが十分に活用されていないと述べ、編集部には「新たな問題に対する臆病さが存在する」と発言した。この態度は学術を指導するという『コムニスト』誌の役割と、外国への極度の警戒が編集員を恐れさせていることに起因するもので、学術研究を指導するには論争的な論文も、基本的な方向性が正しいのであれば掲載すべきだと彼は主張した。しかし、2月に党中央委員会学術文化部長から同誌編集部長へ異動したルミャンツェフはこれに反対して、「マルクス・レーニン主義の枠外にある」論文は公にすべきではないと発言した。後にルミャンツェフは当時を回想して、論争的な論文とそれへの反論を掲載するという『歴史の諸問題』誌の方法は、自由な議論にとって有益であり、何の問題もないと考えていたと述べている。しかし、『コムニスト』誌編集長としての彼の発言には、誌上での論争に慎重な立場を取っていたことが見て取れる。会議の最後には議長チェブラコフも、「技術の分野では論争的な論文を掲載することは可能でしょう。しかしながら、イデオロギーに関する問題であれば、その純粹さのために闘うべきです。社会主義と帝国主義のイデオロギーの闘争を考慮すれば、なおさらです」と主張した⁴²。

41 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. Л. 107.

42 ЦХДОПИМ. Ф. 3273. Оп. 1. Д. 4. Л. 10, Д. 6. ЛЛ. 2, 14, 17-8, 20, Старушенко (ред.) Наука и власть. С. 171.

チェブラコフの発言が示すように、冷戦という国際環境は『コムニスト』誌編集部が誌上での公開の議論に慎重な態度を示す重要な要因となっていた。ただし「雪どけ」初期の時点では、同誌も誌上での議論の重要性自体を否定していたわけではなかった。同誌は1955年7月号で、人文・社会科学の学術誌上で行われている議論を分析し、学術の発展と社会の再建のためには論争的なテーマを自由に議論することが不可欠だと述べた。さらにそれを組織する役割を担うのは「学術共同体の擁護者」たる学術誌であるとし、『歴史の諸問題』誌上での議論も他の雑誌とともに肯定的に紹介した。それと同時に、あらゆる論争はマルクス・レーニン主義の方法論に基づくことが必要だとも述べて、その基盤自体を再検討するために論争の自由を利用することは許されないとも主張した⁴³。この主張は、その後の同誌編集部の『歴史の諸問題』誌への評価の変化を理解するうえで、非常に重要な意味を持つことになる。

読者会議の開催

前述のように『歴史の諸問題』誌編集部は、自由な議論の場を提供することを最重要課題と考えたが、その試みの一つが読者会議の開催であった。編集部は1953-56年に読者会議を各地で数十回開催し、モスクワでは1956年1月25、27、28日に大規模な会議を組織した。編集部はこの会議への出席を『プラウダ』紙上で広く呼びかけ、650人以上の歴史家や教師、図書館職員、文書館職員らが出席した⁴⁴。

モスクワの読者会議ではブルジャーロフとパンクラートヴァに加えて37人が発言し、その多くが同誌の改革を称賛した。共産党中央委員会に付属する党高等研究所の歴史家B. Д. Дачукは、同誌が1905年のモスクワ蜂起に関するヤコヴレフ論文を掲載したことを批判したが、ブルジャーロフはエスエルやメンシェヴィキを含む民主主義政党を統一しようとした当時のポリシェヴィキの戦略を無視すべきではないとの自説を繰り返した。これに加えて、ソ連の歴史家はあらゆる国の歴史、特に、「反動

43 О дискуссиях в научных журналах // Коммунист. №7. 1955. С. 117-28.

44 С. И. Потолов (ред.) М. П. Вяткин. Страницы жизни и работы. 2-е изд. СПб, 2007. С. 100, Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 67. Л. 8. モスクワでの会議には、ヴェリニウス、ハリコフ、クラスノダールから出席した参加者もいた。РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 23. Л. 26.

的伝統だけでなく進歩的伝統も持つ」アメリカの歴史を知るべきだと主張した⁴⁵。

党中央委員会学術・高等教育部長キリリンと次長K. クズネツォヴァは党中央委員会にこの読者会議に関する報告を送付し、ブルジャーロフの発言を批判した。報告によればブルジャーロフは1905年革命でのメンシェヴィキの役割を称賛し、ペテルブルグの党組織を長期間指導し、後にスターリンと対立して処刑されたジノヴィエフの役割を解明すべきだと主張したという。さらにブルジャーロフは、ロシア帝国の民族政策を美化しているとして学校用の歴史教科書を批判した。これに加えて出席者の一人でモスクワの国立図書館で働く非党員歴史家エンガリガルトも、「党の指示を待つべきではない」と出席者に呼びかけ、なぜなら「中央委員会で働く人々は天才ではなく、独ソ戦期の「チェチェン人の強制移住のように誤った政策を採用する可能性もある」からだ」と主張したという。学術・高等教育部のスタッフはパンクラートヴァに、ブルジャーロフの「誤ったアプローチ」を訂正するよう助言したが、彼女もこれに従わず、会議の結語で、ブルジャーロフの講演は編集部全体の立場であり、党の路線に従っていると発言した。これらの発言に対して、会議に出席した学術職員や教員、宣伝員は当惑や憤りを示しているとキリリンらは報告し、同誌の活動を審議するために党中央委員会会議の開催を提案した⁴⁶。しかし、この批判は、『歴史の諸問題』誌の活動方針を変えるには至らなかった。

ヤコヴレフ論文には、モスクワ党委員会歴史研究所長Г. Д. コストマロフからも批判が上がった。彼は編集部に宛てた書簡で、ヤコヴレフはメンシェヴィキを指導した「トロツキーの擁護者」だとして、論文掲載は誤りだと誌上で認めるように要求した。しかし、この批判を審議した1956年1月の編集部会議ではこれに同調する声は聞かれず、編集員のB. B. ペン

45 Конференция читателей журнала “Вопросы истории” // ВИ. №1. 1956. С. 199-213.

46 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 23. ЛЛ. 20-5. スターリン末期に北カフカース諸民族史に関する公式見解を形成したアゼルバイジャン共和国党第一書記M. Д. バギーロフは1954年3月に逮捕され、これ以降独ソ戦期の強制移住をはじめとする北カフカース史を再検討すべきだという声が拳がり始めていた。この読者会議でも、ピクマンら数人の出席者が19世紀の対ロシア反乱の再検討を編集部提案した。Tateishi, “Reframing the “History of the USSR,” pp. 101-3.

トコフスカヤは、もしこの要求を認めれば、2年に及ぶ編集部「史実の粉飾との闘い」をすべて否定することになると主張した。審議の結果、編集部はヤコヴレフとコストマロフや他の歴史家たちを招いて、この問題を議論する場を設けることを決定した⁴⁷。

パンクラートヴァは1956年1月に、コストマロフが編集部宛てた批判を党中央委員会書記シェピーロフに送り、共産党史研究の誤りを正そうとする同誌の努力を妨げているとこれに反論したうえで、この問題に関する学術会議の開催を提案した。さらにコストマロフと個人的に話し合い、彼も会議の開催に同意したと伝えている。しかし、会議は2月末から3月上旬にかけて数回開催されたものの、コストマロフは現れず、彼が率いる研究所からの出席者も皆無であった。他方でコストマロフは2月18日に党中央委員会学術・高等教育・学校部に『歴史の諸問題』誌を非難する書簡を送り、同誌が「政治的誤りと歪曲」を含む多くの論文を掲載していると主張した。そのうえで、ヤコヴレフ論文はボリシェヴィキがモスクワ蜂起を指導できなかったことを強調していると主張して、ヤコヴレフやブルジャーロフはメンシェヴィキやトロツキー主義者とボリシェヴィキとの差異を曖昧にしていると批判した⁴⁸。

こうしてヤコヴレフ論文をめぐる論争は、公開の場でこの問題を議論しようとした編集部の意図とは異なる形で収束することになった。学術・高等教育・学校部の対応は不明だが、この論争は公開の場での議論を重視する編集部と、当局への訴えによって論争を決着させようとするコストマロフの認識の違いを明確に示していた。

第20回党大会と歴史学のペレストロイカ

1956年2月14日に始まる第20回党大会と、スターリンの「個人崇拜」を批判した25日のフルシチョフの秘密報告は、国内外に大きな衝撃を生んだ。特に第一副首相A. И. ミコヤンが、共産党史とソヴィエト史は「我々のイデオロギー活動の中で最も後進的な分野」だと発言し、共産党史に関するスターリン期の公式見解が記された『共産党史小教程』を批判

47 Сидорова. Оттепель в исторической науке. С. 123-5, Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 69. Л. 203.

48 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 70. ЛЛ. 300-1, РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 17-8, 37-40.

したことは、歴史学に大きな影響を与えた⁴⁹。大会後、科学アカデミー歴史研究所ソ連史講座はすべての研究活動の再考を余儀なくされた⁵⁰。パンクラートヴァも歴史家として、また党中央委員として第 20 回党大会で発言し、「個人崇拜」との闘争とその共産党史研究への影響を克服する必要性を訴えるとともに、議論を恐れずに論争を提起する歴史家が出現しているとも述べた⁵¹。

党大会で学術誌の編集員が発言した前例はなく、彼女はこれを非常に危惧していたと『歴史の諸問題』誌編集員セズネフは回想している⁵²。党大会での彼女の登壇は、党指導部の歴史学への関心の高さを示していた。パンクラートヴァの娘マヤによれば、フルシチョフは他の党中央委員会書記の反対を押し切って彼女に党大会での発言を依頼したという⁵³。また同年のレニングラードでの歴史家との会談でパンクラートヴァ自身が述べたところによれば、フルシチョフと閣僚会議長 H. A. ブルガーニンは、「あらゆることを書き、発言することを恐れるなど歴史家たちに伝えてほしい」と彼女に語ったという⁵⁴。

3月5日には党中央委員会幹部会が、秘密報告に若干の修正を加えて党員やコムソモール員に伝えることを決定し、各地の党組織で報告が読み上げられた⁵⁵。科学アカデミー歴史研究所党員会議でも、3月上旬までに党員会議で秘密報告の内容が伝えられた。この会議で研究所長シードロフは、秘密報告が言及した大テロルや、独ソ戦期のチェチェン人、イングーシ人の強制移住といった否定的な事実が呼び起こした「深刻な感情」にもかかわらず、「より楽に呼吸できるようになり、働き、考えることがより楽に」なったと発言している⁵⁶。約 2 週間後、モスクワ大学歴史学部党員

49 XX съезд коммунистической партии. т.1. Москва, 1956. С. 325, 和田「スターリン批判」、77-8 頁。

50 Архив РАН. Ф. 457. Оп. 1-56 г. Д. 501. ЛЛ. 32-3.

51 XX съезд коммунистической партии. т.1. С. 585, 和田「スターリン批判」、82 頁。

52 Селезнев. Страсный борец за линию партии. С. 42.

53 Кан. Анна Панкратова. С. 98.

54 Р. Ш. Ганелин. Советские историки: о чем они говорили между собой. Страницы воспоминаний о 1940-х - 1970-х годах. СПб, 2004. С. 130.

55 松戸清裕「ソ連共産党第 20 回大会再考—1956 年 7 月 16 日付中央委員会非公開書簡に注目して—」池田嘉郎・草野佳矢子編『国制史は躍動する—ヨーロッパとロシアの対話—』刀水書房、2015 年、308 頁。

会議でも出席者に秘密報告が記された 38 ページの冊子が手渡され、その内容が読み上げられた。同学部の C. C. ドミトリエフによれば、冊子には「非公開」、「3 か月以内に返却」と書かれていたが、その中身はすでに繰り返し聞いたことばかりだったという⁵⁷。つまり秘密報告の内容は党員会議を待たずに、急速に歴史家の間に広まっていたと考えられる。科学アカデミーでは様々な機関で会議が開かれ、「ペレストロイカ」が話題になった。ブルジャーロフは『歴史の諸問題』編集部会議で、第 20 回党大会はこれまでとは「比類のない変動」だと述べ、「小教程の館は崩壊しました、土台から崩れ落ちたのです」と発言した⁵⁸。

他方で、秘密報告は党指導部内の改革派と保守派の対立を反映して、スターリン期の肯定的側面についても言及していた。3 月 26 日に『プラウダ』紙が掲載した論文も同様に、スターリンの「個人崇拜」を批判すると同時に、「党と労働者階級に対するスターリンの重要な貢献」にも言及した。こうした両義性は、この問題をいかに理解すべきかという論争を生み出した⁵⁹。ロシア共和国では 1956-57 年の間に共産党史を学ぶサークルが 3 倍以上に増加した。十月革命と内戦を経験したある古参党員は、我々の存命中に革命の回想録を出版すべきだという提案を 1956 年 2 月にパンクラートヴァに送付している⁶⁰。

彼女のもとには、政治や学術に関する知識の普及を目的とする「知識協会」などから講演の依頼が続き、モスクワとレニングラードでは教師や歴史家を対象として 9 回の講演会が開催された。レニングラードでは約 6000 人の党活動家や作家、教師、文書館職員、学生、労働者が講演を聞き、パンクラートヴァはラジオに出演し、キーロフ工場の集会にも参加した。講演後、夜遅くに宿泊先のホテルに戻ると会談を求める人々が彼女を待っており、そこでさらに議論が続いたという⁶¹。

56 ЦХДОПИМ. Ф. 24. Оп.2. Д. 39. ЛЛ. 11-3.

57 Из дневников историка С. С. Дмитриева. Продолжение. 1955-1956 гг. // ОИ. №1. 2000. С. 167, 170.

58 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. Л. 95.

59 Jones, *Myth, Memory, Trauma*, pp.18-24, Jones, "From Stalinism to Post-Stalinism," p. 130, Loewenshtein, "Re-emergence of public opinion," p. 1334, Почему культ личности чужд духу Марксизма-Ленинизма? // Правда. 28 марта 1956.

60 Александр Пыжков. Хрущевская "Оттепель." Москва, 2002. С. 51, Архив РАН. Ф. 697. Оп. 3. Д. 192. Л. 1.

講演を聞いた人々は、個々の史実の解釈や歴史教育の方法などについて様々な問いを提出したが、パンクラトヴァは後にこれらの質問を分析した報告を党中央委員会に送付している⁶²。このなかには、危険なのは「我が国の歴史家に思想弾圧に屈する傾向があり、これが持続していることだ」という主張や、スターリン時代に歴史が歪曲されたのであれば、そのとき「我が国の歴史家はどこにいたのですか、なぜ修正しなかったのでしょうか」と歴史家の責任を問う声もあった⁶³。パンクラトヴァ自身に対しても、「あなたと意見を異にする権利が我々にあるのか」という問いに答えてほしいという要望や、彼女がかつて編集したソ連史教科書がスターリンを肯定的に描いていたことを批判して、「個人崇拜に対するあなたの見解をどう説明しますか」と問い正すものもあった。ある出席者は、なぜスターリンの存命中に「個人崇拜」の問題に言及しなかったのかと質問し、次のように書いた。

…あなたには広く認められた権威に反して発言する力と勇気がなかったのでしょうか？ そのように見受けられます。これはマルクス主義歴史家を擁護する理由にはほとんどなりません…このような「理想化」にはこれ以上耐えられないとあなたは言います。会場に笑いが広まったのは偶然ではありません。あなたは自分の誤解や誤りを正当化すべきではなかったと思います。それは今となっては意味のない試みだからです⁶⁴。

スターリン期から党を代表する歴史家であり、多くの教科書の作成に携わった彼女にとって、スターリン死後の自身の見解の変化に理解を得るのは非常に困難であったと思われる。実際にレニングラードの歴史教師との会談では、公式路線のたび重なる変化に適合することは困難だと率直に認め、次のように述べている。

61 Селезнев. Страсный борец. С. 42-3, Архив РАН. Ф. 697. Оп. 1. Д. 181. Л. 4, Ф. 457. Оп. 1. Д. 692а. ЛЛ. 54-5.

62 Первая реакция на критику “культ личности” И. В. Сталина // ВИ. 2006. №8. С. 3-21, №9. С. 3-21, №10. С. 3-24.

63 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 1. Д. 181. ЛЛ. 26, 98, 154.

64 Первая реакция // ВИ. №10. С. 20, Архив РАН. Ф. 697. Оп. 1. Д. 181. ЛЛ. 22, 49.

…私たちはまず真剣な自己批判をする必要があります。そして心理的なペレストロイカを必要としているのです。…私自身や他の多くの人にとって、——それは簡単ではありません。…ここに座っている人々は若い世代です。彼らにとって、これは簡単なことなのかもしれません。例えば、私は若くはなく、多くのペレストロイカを体験してきましたが、今回のペレストロイカは最も困難です（会場のざわめき）。なぜ同志たちが私の発言に笑っているのか理解できません。理解できませんが、おそらく笑っている同志にとっては、これらすべてが簡単なことなのでしょう。…⁶⁵

モスクワ大学の歴史家ドミトリエフは日記に、彼女が講演で「多くのペレストロイカ」について語った際、会場に「皮肉な笑い」が広まり、講演は不成功に終わった、彼女は憤りながら会場を去ったそうだと記している。そのうえで、彼女がすでにその「立場を5回変えた」ことを考えれば当然だと書いたが⁶⁶、他方で講演の出席者の中には同情の声もあった。

あなたが会場の笑いの理由を誤って理解したのではないかと心配しています。私たちは決してあなたや、深刻な問題に対するあなたの真剣な態度を笑ったわけではありません。「数多くのペレストロイカ」という言葉が、同じく何度もペレストロイカを体験してきた私たちにとって、非常になじみ深いものだったので笑ったのです。どうか怒らないでください!⁶⁷

会場に広まったどよめきや笑いは、スターリン期やソ連史全体に及ぶ公式見解の急激な変化に対する当惑や不安、期待、スターリン期を代表する党員歴史家であったパンクラートヴァから率直な告白を聞いたことへの驚き、彼女への不信感と批判、同情など、出席者の様々な感情を反映していたと思われる。彼女は3月7日に開かれた『歴史の諸問題』誌編集部会議でも「多くのペレストロイカ」に言及し、「今最も根本的に危険なのは、私たちのペレストロイカが再び形だけのものに終わること」だと発言している⁶⁸。彼女とレニングラードの歴史家の会談に出席したP. III. ガネリン

65 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 1. Д. 180 а. Л. 52.

66 Из дневников // ОИ. №1. 2000. С. 168.

67 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 1. Д. 181. ЛЛ. 217-217 об.

68 Сидорова. Оттепель в исторической науке. С. 129.

は、彼女は「生きるための闘いではなく、死を覚悟した闘いの中にいて、引き下がるつもりはないかのようだった」と回想しており⁶⁹、彼女が多くの批判に直面しながらも、歴史学の「バレストロイカ」を徹底しようと決意していたことがうかがわれる。

『歴史の諸問題』誌への批判の高まり

公的自国史像の解釈をめぐる論争と混乱の中で、同誌の活動はより多くの称賛と批判を集めるようになっていた。なかでも1956年4号に掲載されたブルジャーロフ論文は、多くの関心を集めた。論文は、帝政崩壊直後のボリシェヴィキの指導者たちは、スターリンも含めて革命に対して一貫した方針を持っていたわけではないとし、スターリンはレーニンと立場を異にし、カーメネフと同様に臨時政府を条件付きで支持してメンシェヴィキとの協力を目指したと述べていた。この論文は党中央委員会書記ミコヤンの支持を得たが、スースロフを中心とする党指導部の保守派の反発を引き起こした⁷⁰。

さらにこの論文には、編集部内からも批判が提起された。編集員ガヴリロヴァが党中央委員会に送付した報告によれば、論文の草稿を検討した編集部会議では、二月革命直後のボリシェヴィキが政治的、組織的混乱にあったという主張を問題視し、トロツキーの議論との類似性を批判する声が上がったという。しかし、スターリン期からの「首尾一貫したマルクス主義者であるかのようにふるまう」ブルジャーロフとパンクラートヴァは立場を変えず、論文はその主張を維持したまま掲載されることになったとガヴリロヴァは非難した⁷¹。

このように『歴史の諸問題』誌の活動とブルジャーロフの主張に対して党指導部と編集部双方に賛否が起こったが、同年6月28日にポーランドで反ソ連暴動が起こり、夏にはハンガリーで政治改革を求める動きが活発化すると、論争は次第に異なる様相を呈するようになった。この時期以降、様々な新聞や雑誌にはほぼ同時に同誌の批判が掲載されたことについて、パンクラートヴァは、「偶然とは考えられない」とノートに書き残し

69 Ганелин. Советские историки. С. 130.

70 Е. Н. Бурджалов. О тактике большевиков в марте – апреле // ВИ. №4. 1956. С. 38-56, 和田『スターリン批判』、346-7頁。

71 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. Л. 98.

ている⁷²。

この大きな転換点を迎える直前の6月19-20日、編集部はレニングラードで、科学アカデミー歴史研究所レニングラード支部と読者会議を共催した。同支部長M. II. ヴャトキンによれば会議は大きな関心を集め、500人以上の出席者の中からブルジャーロフと14人が発言した⁷³。その内容は多岐にわたり、スターリン期にパンクラートヴァの編集で作られたソ連史教科書の修正を援助すべきだという意見などが表明された。さらに1955年11号と1956年4号に掲載されたペトロヴァとブルジャーロフの論文が、1905年革命時のメンシェヴィキの活動を理想化しているという批判も聞かれた。ブルジャーロフは、外交史や非ロシア諸民族史、社会思想史など様々な分野についてスターリン期の公式見解を批判した。1905年革命については従来の主張を繰り返し、真実の「4分の1だけを回復すること」はできない、「すべての真実を回復しなければならない」と訴えた⁷⁴。

彼の講演は多くの出席者に称賛されたが、ポーランドで暴動が起こった6月28日、レニングラード共産党州委員会付属共産党史研究所はこれを審議する会議を開いた。研究所長クニャゼフと研究員コンスタンチノフは、ブルジャーロフはトロツキーやジノヴィエフら「人民の敵」を再評価して「ブルジョア客観主義」を唱道し、誤った指示によって歴史家を混乱させており、厳しく罰せられるべきだと主張した。さらにクニャゼフは7月2日に連邦の党中央委員会にブルジャーロフを批判する報告を送付したが、自身が率いる共産党史研究所の研究員たちが、「ブルジャーロフの精神で研究活動の「ペレストロイカ」を要求している」こともその背景にあった。報告によれば、読者会議後にクニャゼフはブルジャーロフと会談を行い、資本主義諸国がソ連を包囲している状況では歴史家はソ連の社会について「100%の真実を描くべきではない」、なぜなら敵がそれを利用する可能性があるからだと主張した。しかしブルジャーロフは、資本主義の包囲の危険性は過大評価されていると反論したという⁷⁵。

72 Городецкий. Журнал “Вопросы истории.” С. 73.

73 Архив РАН. Ф. 1577. Оп. 2. Д. 396. Л. 87, Конференция читателей журнала “Вопросы истории” в Ленинграде // ВИ. №7. 1956. С. 184-90.

74 詳細については、Доклад Е. Н. Бурджалова о состоянии советской исторической науки и работе журнала “Вопросы истории” // ВИ. №9. 1989. С. 81-96, №. 11. 1989. С. 113-38, 和田『スターリン批判』、351-4頁。

クニャゼフの批判には、冷戦という国際環境のなかでは歴史の真実を描くことが正しいわけではないという発想が明確に示されていた。このような考え方はスターリンの死と第 20 回党大会を経て批判的に再考されるようになったが、6 月 28 日のポーランドでの事件後、一部の歴史家はクニャゼフと同様に冷戦のなかで歴史研究を自由化することに疑問を呈するようになった。

東欧情勢の変化と『歴史の諸問題』誌をめぐる論争

6 月 28、29 日に『歴史の諸問題』誌はキエフで読者会議を開き、ここでも 500 人の出席者が集まった。この会議ではブルジャーロフが雑誌の活動について報告するとともに 12 人が発言し、その多くが同誌の活動を称賛したが、ウクライナ史に関する論文や資料の掲載が不十分であるなど、いくつかの問題点も指摘された。キエフ国立大学の E. Г. フェドレンコと H. P. ドニイは、スターリンの「個人崇拜」の問題の解明も必要だが、スターリンが党内の反レーニン主義派を敗北させたことも示すべきだと主張した⁷⁶。またキエフ国立音楽院マルクス・レーニン主義講座長ペロウスとキエフ国立大学講師コロスタレンコは会議後にフルシチョフに報告を送り、ブルジャーロフはジノヴィエフやカーメネフら「革命の敵」を復権し、自らの立場を利用して「社会主義の敵を利している」と批判した。さらにキエフの多くの研究者や教師も彼らと同じ見解を共有していると二人は訴えた⁷⁷。

6 月には党の理論誌『コムニスト』誌も、『歴史の諸問題』誌を批判する巻頭論文を掲載した。論文は、トロツキー主義者や右翼反対派に対する党の闘争の重要性を十分に示さず、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの論争を隠蔽しようとする誤った傾向が一部の歴史家や教師の中に存在するとして、それは『歴史の諸問題』誌が掲載する論文にも見受けられると述べ、これを「編集部の性急で根拠のない見解」のためだと批判した⁷⁸。

新たな転機となったのは 8 月 5 日に『レニングラード・プラウダ』紙

75 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 57-9, 121.

76 Конференция читателей журнала “Вопросы истории” в Киеве // ВИ. №8. 1956. С. 198-203.

77 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 74-7.

78 За творческую разработку истории КПСС // Коммунист. №10. 1956. С. 24.

に、レニングラードでの読者会議とブルジャーロフの講演を批判するA. アレクサンドロフの論文が掲載されたことであった。この論文は、読者会議でブルジャーロフが、スターリン時代に歴史研究に課された「禁止」を同誌のイニシアチヴにより取り消したと宣言してメンシェヴィキの再評価を試みたとし、学術の党派性を侵害していると批判した⁷⁹。後に党中央委員会学術・高等教育機関・学校部長キリリンが党中央委員会に宛てた報告によれば、A. アレクサンドロフとは偽名であり、実際に論文を執筆したのはレニングラード共産党州委員会附属共産党史研究所長クニャゼフだという。他方で同研究所のA. H. ダリスキーはパンクラートヴァとブルジャーロフに宛てた書簡の中で、同研究所のコンスタンチノフが「臆病にも」偽名で『歴史の諸問題』誌を批判したと述べており、2人が共同で執筆した可能性もある⁸⁰。

これに対して同誌編集部は『レニングラード・プラウダ』紙に書簡を送り、この論文を「学術のペレストロイカ」に反していると批判してブルジャーロフの反論を同紙に掲載することを要求した。しかし、後にブルジャーロフが党中央委員シェピーロフに宛てた苦情によれば、同紙は反論の掲載を拒否したという。パンクラートヴァはこの論文と読者会議でのブルジャーロフの講演の速記録を党中央委員会書記スースロフに送り、歴史学の誤りを正そうとする同誌の努力が抵抗に直面していると訴えた。さらにクニャゼフとコンスタンチノフがブルジャーロフへの批判を中央委員会に送付したことを知ると、フルシチョフに宛てて、二人が読者会議の場では発言せずに、中央委員会への書簡でブルジャーロフを批判したことを非難した⁸¹。これらの抗議は、『歴史の諸問題』編集部がこの時点でも一貫して公開の場での議論を重視していたことを示していた。

論争を公開の場で解決すべきだという発想は、同誌を支持する歴史家たちにも共有されていた。9月1日には科学アカデミー歴史研究所レニングラード支部長ヴァトキンを含むレニングラードの17人の歴史家が同紙に連名で抗議文を送り、さらに連邦の党中央委員会学術・高等教育機関・学

79 A. Александров. За подлинно-научной подлинно-научной подход к вопросам истории // Ленинградская правда. 5 августа 1956.

80 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 108, 155.

81 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 1. Д. 208. ЛЛ. 1-2, Оп. 2. Д. 61. Л. 16, РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 61-71, 78, 153.

校部長キリリンとレニングラード党州委員会学術部長ボグダノフ、同紙編集長クルトウニニンに書簡を送った。この書簡はブルジャーロフの講演の速記録を引用して『レニングラード・プラウダ』紙の論文は速記録を歪曲していると主張し、第 20 回党大会の精神に反しているとして、彼らの抗議を同紙に掲載することを要求した⁸²。

科学アカデミー歴史研究所レニングラード支部長ヴァトキンは同支部の党員会議でもこの論文を批判し、抗議文を送ったことは正当な行為であったと強調した。それに加えて、『レニングラード・プラウダ』紙が抗議の掲載を拒否した場合は、連邦中央の『プラウダ』紙に書簡を送付すべきだと主張した。研究員 H. E. ノソフもまた、彼らの抗議は正当であり、広く公表されるべきだという見解を表明した⁸³。しかしながら、『レニングラード・プラウダ』紙は彼らの抗議に回答しなかった。そのため同支部の党会議は、レニングラード州党委員会に党決定の採択を要請し、連邦の党中央委員会学術・高等教育・学校部と『プラウダ』紙に研究所の公式書簡を送ることを決定した。さらにノソフは同部を訪問し、この問題について審議した。この会談では、同部と党中央委員会宣伝扇動部、『プラウダ』紙編集部はともに『レニングラード・プラウダ』紙の論文を誤りと見なしていると伝えられたという⁸⁴。

レニングラードの国立公共図書館で働く 8 人の歴史家たちもまた、『レニングラード・プラウダ』紙の論文に抗議の声を上げた。9 月 5 日、彼らは連邦の『プラウダ』紙に反論を送るとともに、同じ文書をフルシチョフにも送り、論文はレニングラードの歴史家の間に異論と抗議を巻き起こしていると伝えた。彼らは、読者会議に出席した歴史家たちはブルジャーロフの講演が第 20 回党大会の精神を反映していたことをよく理解していると訴え、もしこの論文に対して適切な反論が公表されなければ、第 20 回党大会の決議を実現しようとする歴史家の闘争を妨げることになることと述べて、この抗議が何らかの出版物に掲載されるようにフルシチョフに支援を求めた⁸⁵。

82 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 135-41, ЦГАИПД СПб. Ф. 24. Оп. 96. Д. 145. ЛЛ. 1-9.

83 ЦГАИПД СПб. Ф. 2995. Оп. 6. Д. 7. ЛЛ. 46, 49.

84 ЦГАИПД СПб. Ф. 2995. Оп. 6. Д. 8. ЛЛ. 29, 32-32 об.

85 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 143-52. 抗議に名を連ねた多くの歴史家は党員

ブルジャーロフへの支持は、クニャゼフが率いるレニングラード共産党州委員会附属共産党史研究所の内部でも表明されたが、ここではブルジャーロフを擁護した歴史家たちは困難な状況に追い込まれた。1956年8月に同研究所のII. ミフリンとダリスキーがパンクラートヴァに宛てた手紙によれば、クニャゼフらによるブルジャーロフ批判に反論したことから「報復」を受け、ダリスキーは60歳になるという理由で、クニャゼフから10月1日付で解雇を伝えられた。さらにレニングラード州党委員会もクニャゼフを支持しており、研究所の党組織はダリスキーを擁護できなかったという⁸⁶。

党の理論誌『党生活』誌もまた、同年14号に『歴史の諸問題』誌を批判するE. ブガエフの論文を掲載した。論文は、『歴史の諸問題』誌はボリシェヴィキとメンシェヴィキの対立を過小評価する論文を多数掲載しているとし、西欧のブルジョア歴史学を十分な警戒なしに再評価することを歴史家に要求していると批判して、資本主義と社会主義の平和共存とは「社会主義とブルジョア・イデオロギーの和解」を意味するのではないと主張した⁸⁷。これに対して『歴史の諸問題』誌は同年5号に反論を掲載し、ブガエフ論文は「歴史学のペレストロイカ」を妨害していると主張した⁸⁸。

同誌は8号に再度ブルジャーロフの反論を掲載するとともに、パンクラートヴァは党中央委員会書記にブガエフ論文と『レニングラード・プラウダ』紙の論文への反論を送り、その写しを『コムニスト』誌編集長ルミャンツェフにも送付した⁸⁹。『歴史の諸問題』誌を支持する書簡は読者からも寄せられた。1911年に入党した古参党员で退役陸軍少将のC. И. ペトリコフスキー＝ペトレンコは9月19日に編集部宛てた書簡で、同誌との団結を伝えることを党员としての義務だと述べたうえで、「第20回

ではなく、『歴史の諸問題』誌への共感が非党员の歴史家にも共有されていたことがうかがわれる。たとえば、Архив Российской Национальной библиотеки. Личное дело. Альшиц Д. Н. Л. 13.

86 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 66. Л. 16, РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 108-9, 121-4.

87 E. Бугаев. Когда утрачивается научный подход // Партийная жизнь. №14. 1956. С. 62-72, 和田「スターリン批判」、367頁。

88 О статье тов. Е. Бугаева // ВИ. №5. 1956. С. 215-22.

89 E. Н. Бурджалов. Еще о тактике большевиков в марте – апреле 1917 года // ВИ. №8. 1956. С. 109-14, РГАСПИ. Ф. 509. Оп. 1. Д. 81. ЛЛ. 1-14.

党大会を修正しようとする多くのブガエフが存在している」ことは疑う余地がないとし、これらの試みに断固として反論する必要があると訴えた⁹⁰。

編集部は 8 月 9 日に会議を開き、新聞や雑誌に掲載された一連の批判への対応を議論した。この会議で H. A. フレノフは、ポーランドやチェコスロヴァキアの歴史家は同誌を高く評価していると強調してその活動の正当性を強調したが、セズネフは、同誌は学術共同体や国家だけでなく、他の社会主義諸国に対しても重大な責任を負っていると述べた。彼は、同誌が取り上げるテーマの選択自体が重要な意味を持つことに注意しなければならないとして、真の歴史を描くには困難な時期や失敗も示す必要があるが、「共産党史に関する無数の史実の中から最も困難で暗い側面を選び出し、数年にわたって誌上で検討を続けたとすれば、読者に誤った印象を与えるかもしれない」と述べた⁹¹。これらの発言は、東欧諸国での政治情勢の変化が国内での同誌の評価に与えた影響の大きさを物語っていた。

ブガエフ論文に賛同した党中央委員会付属高等研究所歴史講座長ダチュークは、10 月 11 日に同研究所で『歴史の諸問題』誌を批判する会議を組織した。同時期にはモスクワ大学や、かつてブルジャーロフが講師を勤めた党中央委員会付属社会科学アカデミーでも大規模な会議が開かれた⁹²。後者の会議は 10 月 16、23、31 日に開かれ、当初はアカデミー共産党史講座の研究者に出席を限定していたが、2 回目からブルジャーロフら『歴史の諸問題』誌編集員も出席し、他の研究機関からも出席者が集まった。16 日には 13 の組織から 27 人が、23 日には 17 の組織から 52 人が出席した。この間、ハンガリーでは 23 日に始まった民主化を求めるデモが拡大し、24 日にはソ連による軍事介入が始まり、31 日に開催された最終回には 21 の組織から 145 人が集まった⁹³。

この会議で議論の中心となったのは、ブルジャーロフの見解であった。彼はこの会議でもあらためて自説を繰り返し、歴史学の「党派性」とは歴史の正しい、客観的な描写を意味すると述べて、ボリシェヴィキのかつて

90 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 78. Л. 13.

91 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 71. Л. 210, 223-5.

92 Из дневников // ОИ. №1. 2000. С. 145.

93 РГАСПИ. Ф. 606. Оп. 1. Д. 686. Л. 173. ハンガリーへの軍事介入については、和田『スターリン批判』、382-9 頁。

の「誤りや動揺、中途半端さ」を含めて何も隠すべきではないと主張した。出席者からはブルジャーロフがかつて社会科学アカデミーの講義でスターリンを称賛していたことへの批判も上がったが、彼はそれを「誤り」と認めたくえて、「自分の誤りを正したい」のだと反論した。出席者のなかには、『歴史の諸問題』誌の問題は会議を主催した共産党史講座にも共通しているという意見や、スターリンを崇拜し、誤った講義や執筆活動を行ったのはブルジャーロフだけではないとして、互いを攻撃するのをやめて「個人崇拜」の歴史学への影響を克服するために共闘すべきだと述べて、ブルジャーロフを擁護する声もあった。これに対して共産党中央委員会付属マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン研究所長のГ. Д. Оबीーチキンは、ブガエフ論文による批判をより積極的に支持した。共産党史の再検討に尽力し、「雪どけ」期の政治改革を指導した古参ボリシェヴィキであるГ. И. Петровスキーとも親しい関係にあったオबीーチキンがブガエフの批判に賛同したことは、政治改革と歴史の見直しを推進してきた歴史家のなかにも同誌への批判が広まりつつあったことを示していた⁹⁴。

ボリシェヴィキとメンシェヴィキの関係など個別の史実の解釈とは別に、一連の批判に対する同誌の対応への非難もあった。前述のように1956年初頭に同誌が1905年革命に関する会議を開催するきっかけを作りながら、会議への出席を取りやめた歴史家コストマロフは、『コムニスト』誌や『レニングラード・プラウダ』紙など党の出版物に反論した『歴史の諸問題』誌の「無礼な態度」を非難し、自分は既に若くはないが、「一般誌が中央の組織に反論したという例」をいまだ知らないと述べて、『歴史の諸問題』誌は反論を誌上に掲載するのではなく、これらの出版物の編集部や党中央委員会に書簡で伝えるべきだったと主張した。しかし、社会科学アカデミーのФ. Д. Креutzはこの発言を「旧式の」議論だと批判して、他の社会科学雑誌が「無言のまま、ほとんど何もしていない」なか、『歴史の諸問題』誌は歴史学の刷新を進める数少ない雑誌だとして編集部を擁護した⁹⁵。同誌を擁護する声は同様の会議でも表明されたが、少数に

94 Российский государственный архив социально-политической истории (РГАСПИ). Ф. 606. Оп. 1. Д. 686. ЛЛ. 38, 70-1, 89-90, 98, 108. Петровスキーについては、和田「スターリン批判」、42頁。

95 РГАСПИ. Ф. 606. Оп. 1. Д. 686. Л. 110, 135-6.

とどまった。さらに多くの出席者が若者への悪影響に言及し、モスクワ大学では「誰がより大きな権威を持っているのか、レーニンか、トロツキーか？」という論争が学生の間で起こっており、若者はソ連史に信頼を失っているという批判が提起された⁹⁶。

党中央委員会に窮状を訴えた『歴史の諸問題』誌編集部の書簡によれば、ハンガリーとポーランドの政治情勢や、スターリンと対立して独自路線をとるチトーの発言を多くの歴史家が引用しており、「新たな環境との闘争の中で、第 20 回党大会の決議は廢れた」という発想が広まっていた。モスクワ大学歴史学部教授ナドトチェエフはある会議で、「今やスターリンを批判する者は我が党を批判する者だ」と発言したという⁹⁷。こうして『歴史の諸問題』誌に関する歴史家の論調は、1956 年の夏から秋にかけて大きく変化していった。

『歴史の諸問題』誌に対する党の批判と編集部の交代

東欧の情勢は、党指導部の政策にも重大な影響を与えた。ハンガリーへの軍事介入をフルシチョフが決めたのは、第 20 回党大会後のソ連国内での体制批判の高まりを危惧したためだと指摘されている。実際に第 20 回党大会後には各地の党員会議で、スターリン期だけでなくソヴィエト体制自体への批判が提起されるようになっていた。さらにハンガリーへの軍事介入は、国内の体制批判をさらに増大させたことが知られている⁹⁸。

こうした状況のなか、12 月 19 日に党中央委員会は「反ソヴィエト的攻撃と敵対分子を削減する党組織の活動の強化について」と題した非公開書簡を全国の党組織に送付した。書簡はハンガリー情勢の変化をソ連と敵対する資本主義諸国との対立の激化の表れとみなし、BBC やラジオ・リバティが反ソヴィエト的意識を広めていると述べた。さらに、地方の党指導者たちによるフルシチョフの秘密報告の解釈の誤りや、学生たちの間に広まる反ソヴィエト的見解に言及し、スターリン死後の恩赦によって収容所から解放された数千人の中に含まれるメンシェヴィキや「ブルジョア・ナ

96 ЦГАИПД СПб. Ф. 400. Оп. 9. Д. 435. ЛЛ. 114-5.

97 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 81. Л. 18.

98 Erik Kulaving, *Dissent in the Years of Khrushchev: Nine Stories about Disobedient Russians*, Palgrave Macmillan, 2002, p. 22, Jones, *Myth, Memory, Trauma*, p. 57. 松戸「ソ連共産党第 20 回大会再考」、307-8 頁。

シヨナリスト」への警戒を続けることを要求した。これに加えて、誤った自由化を求める芸術家や知識人の一例として『歴史の諸問題』誌を挙げ、1905年革命時のメンシェヴィキの政策の有害さや、ボリシェヴィキとメンシェヴィキの対立を過小評価したと批判した。党中央委員会は全国の党組織にこの書簡を非公開会議で議論することを求め、その後数か月間、党員の反応を詳細に調査した⁹⁹。

翌年1月4日には『ソヴィエト大百科事典』編集部で党員会議が開かれ、120人の出席者の前でこの非公開書簡が読み上げられ、同日にはモスクワ大学歴史学部党組織が、翌日には『コムニスト』誌党組織が同様の会議を開催した。モスクワ大学歴史学部党組織ではC. K. ブシュエフが、英米の雑誌は北カフカースやポーランドの民族運動史についてソ連の歴史家が再び議論を始めたことを歓迎している、なぜならこれらの運動は常にロシア帝国の国家権力を弱体化させてきたからだと述べて、ブルジャーロフの議論はこれらの西欧諸国の雑誌の論調に類似していると非難した¹⁰⁰。

ブルジャーロフとパンクラートヴァはこの会議への批判を党中央委員会書記や学術・高等教育・学校部などに送付し、非公開書簡が批判した「イデオロギー的誤り」は認めながらも、「反党的」、「トロツキー主義者」との批判は否定した¹⁰¹。この編集部の反論を調査した学術・高等教育・学校部長キリリンも同誌を支持し、『レニングラード・プラウダ』紙の論文は事実を一部歪曲しており、モスクワ大学歴史学部の会議ではブルジャーロフへの「粗野な個人攻撃」がなされたと党中央委員会に伝えた。特にブシュエフの発言は扇動のようであり、同誌が「反党的」だという批判には根拠がないと報告した¹⁰²。かつて編集員だったドゥルジーニンもパンクラートヴァに書簡を送り、編集部が広範かつ大胆に問題を設定し、スターリンの「個人崇拜」に関する問題を克服して読者に多様な情報を提供して

99 РГАНИ. Ф. 89. Перечень 6. Док. 2. Л. 8, Erik Kulaving, *Dissent in the Years of Khrushchev*, p. 19-21, Jones, *Myth, Memory, Trauma*, pp. 57-8, 和田『スターリン批判』、395頁。

100 ЦХДОПМ. Ф. 478. Оп. 3. Д. 212. Л. 60, Ф. 1129. Оп. 1. Д. 12. кор. 2. ЛЛ. 5, 8, 10, Ф. 3273. Оп. 1. Д. 6. кор. 1. Л. 105.

101 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. ЛЛ. 157-62, Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 83. ЛЛ. 1-5.

102 РГАНИ. Ф. 5. Оп. 35. Д. 39. Л. 155.

きたことに異論の余地はないと記した。さらに、不注意や行き過ぎは部分的なものに過ぎないとして、「雑誌の正しい路線が将来も維持されることを、多くの読者と同様に心から願っています」と支持を伝えた¹⁰³。

しかし、3月6日に党中央委員会はパンクラートヴァとブルジャーロフ、シードロフらを招集して同誌の活動を審議し、書記シェピーロフとボスペロフが編集部の方針を厳しく批判した¹⁰⁴。パンクラートヴァは事前に報告草稿を準備し、「党派的でない学問は存在しないし、存在しえない」として同誌の活動がソ連の国益を十分に守れなかったことを認めていた。しかし、発言を許されず、会議後に体調を急激に悪化させ、翌日入院して編集活動から退いた¹⁰⁵。その3日後、党中央委員会はブルジョア歴史学に対する歴史家の闘争を妨げたとして同誌を批判する公式決定を採択し、ブルジャーロフを解任した。この決定について、「雪どけ」の初期に党中央委員会学術文化部顧問として同誌と対立したヴォロブエフは、自分はこの決定には関与していないが、自身が集めた資料が決定作成に利用されたのだろうと回想している。つまり、この公式決定は「雪どけ」初期に党中央委員会学術文化部から同誌に向けられた批判とは直接の関係はなかった¹⁰⁶。

その後『党生活』誌と『コムニスト』誌は、『歴史の諸問題』誌を批判する論説を続いて掲載した。『党生活』誌は、メンシェヴィキやエスエルを「専制の手先」として描き、党内の反レーニン派を「人民の敵」とする「卑俗化」を『歴史の諸問題』誌が批判したことは正当であったと認めながらも、「帝国主義勢力が歴史の歪曲を武器としている」現在では、歴史は常に闘争の舞台であり、特別な警戒が必要だと主張した¹⁰⁷。さらに『歴史の諸問題』誌新編集部も1957年3号の巻頭論文で旧編集部を批判し、社会主義諸国で活発化する「日和見主義」や「修正主義」を国内外の出版

103 *Городецкий*. Журнал “Вопросы истории.” С. 76.

104 Из дневников Сергея Сергеевича Дмитриева // ОИ. №2. 2000. С. 153.

105 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 2. Д. 84. Л. 2, Из дневника С. С. Дмитриева // Кукушкин (отв. ред). Историк и время. С. 175-6.

106 Справочник партийного работника. Вып. 2. Москва, 1959. С. 331, Интервью с академиком. С. 28.

107 Строго соблюдать ленинский принцип партийности в исторической науке // Коммунист. №4. 1957. С. 25-6, 28, О журнале “Вопросы истории” // Партийная жизнь. №23. 1956 С. 71-7.

物が厳しく批判したにもかかわらず、旧編集部は何ら発言しなかったと述べた¹⁰⁸。

4月18日、パンクラトヴァは友人のA. П. ソルンツェヴァにサナトリウムから手紙を送り、「余計な行政や組織、編集の仕事のすべて」を辞めて、学術活動に戻ると決めたと伝え、「狂気じみたむなしい出来事や日和見」は自分には何の関係もないと語った。しかし彼女の死の直前に面会した人物が書き残した文書によれば、彼女は悲哀に打ちひしがれながらも、最期まで党指導部が自分に何を望んでいるのかを考えずにはいられないようだったという。5月25日の夜、彼女は心臓発作のために死亡した¹⁰⁹。訃報を聞いたモスクワ大学歴史学部のドミトリエフは、「『上層部』で歴史学を代表し、善良な庇護者の役割を担う人物は、いまや誰もいない」と日記に記した¹¹⁰。

結び

「雪どけ」期の知識人の世界には改革を望む声とともに、改革への懐疑や反発、恐れが混在していた¹¹¹。『歴史の諸問題』誌を批判した歴史家の論調は、彼らが冷戦や資本主義諸国の包囲の危険性といった発想をスターリン期から維持していたことを示していた。同誌はブルジャーロフを中心としてスターリンやボリシェヴィキと対立した人物、政党の再評価を進めるとともに、パンクラトヴァはその地位を利用してスターリン期に政治的抑圧を受けた人々の名誉回復に尽力した。こうした活動は一部の歴史家と共産党指導部に、同誌が国内外に反体制派を生み出すのではないかと、う懸念を抱かせた。他方で二人がともにスターリン期を代表する党員歴史家であったことは、同誌の急進的な改革を可能にすると同時に、歴史家や

108 За ленинскую партийность в исторической науке! // ВИ. №3. 1957. С. 3-13.

109 Кукушкин (ред.) Историк и время. С. 337, Архив общества “Мемориал”. А. М. Панкратова. Дневниковая запись. Л. 2. 執筆者は不明。

110 Из дневника. С. 176.

111 Stephen V. Bittner, *The Many Lives of Khrushchev's Thaw: Experience and Memory in Moscow's Arbat*, Cornell University Press, 2008, p. 12. 文学論争における人々のメンタリテイの連続性を強調した見解としては、Denis Kozlov, “Naming the social evil: The readers of Novyi mir and Vlademir Dudintsev's Not by Bread Alone, 1956-59 and beyond,” in ed. Jones, *The dilemmas of de-Stalinisation*, p. 94.

一般の読者に不信感を抱かせる要因にもなった。ヴォロブエフも二人がスターリンの死後に立場を変えたことについて、「一体いつ彼らは真実を語るというのか」と疑問に思ったと回想している¹¹²。

これに加えて、本稿が示したように、『歴史の諸問題』誌を中心とする論争では、個々の史実の解釈だけではなく、冷戦という状況のなかで自国史をいかなる方法で議論すべきかという論点も重要な意味を持っていた。そして第20回党大会以降の国内外での体制批判の拡大が、後者の論点に歴史家の論争と党指導部の関心を集中させたのである。同誌とそれを支持する歴史家たちは、一連の論争を『レーニングラード・ブラウダ』紙などの出版物に掲載することを繰り返し要求したが、それは許されなかった。同誌を批判した前述の1957年3月の党中央委員会の会議では、レーニングラードの党指導部と共産党州委員会付属共産党史研究所が、批判への抗議文の公開を許容しなかったことが肯定的に評価されたという。このことを同研究所の会議で報告した所長クニャゼフは、議論の公開を認めなかったことは「我々の党組織と研究所の誇り」だと自画自賛した¹¹³。1957年1月、解雇を言い渡された同研究所のダリスキーはパンクラートヴァに再び手紙を送り、残念なのは研究所の歴史家たちが自分を支援しないのではなく、「弱点を批判し、彼ら自身の意見を持つことができる」歴史家がかもはやいなくなったことだと伝えている¹¹⁴。

こうして1957年3月の時点では、『歴史の諸問題』誌編集部の挑戦は悲劇的結末を迎えたかのように見える。しかし、編集部交代が、歴史家たちによる自国史像の再検討の試みを止めたわけではなかった。前述のように同誌に対する党指導部と歴史家の批判の主な要因は議論の公開性を認めるか否かという問題にあり、メンシェヴィキやスターリンと対立した政治指導者たちの評価、北カフカース諸民族の歴史や第二次世界大戦といった個々の史実の解釈については、同誌が活性化させた議論がその後も継続したのである¹¹⁵。党中央委員会学術文化部顧問チェルニャエフ（当時）の回

112 Интервью с академиком. С. 26.

113 ЦГАИПД СПб. Ф. 4000. Оп. 9. Д. 561. ЛЛ. 5-6.

114 Архив РАН. Ф. 697. Оп. 3. Д. 261. Л. 6 об.

115 Обсуждение макета 3-го тома Истории КПСС в Институте марксизма-ленинизма при ЦК КПСС с участием старых большевиков // Грани. №65. 1967. С. 129-56, 和田春樹「流れの変化に抗する歴史家たち—ソ連史学史ノート:

想によれば、3月の党中央委員会決定の採択後、ミコヤンが介入し、同誌への批判は再び「第20回党大会の達成を侵害する」と考えられるようになったという¹¹⁶。前述のように、党中央委員会学術・高等教育・学校部や一部の歴史家は1957年初頭の時点でも同誌への支持を表明しており、同誌を擁護した歴史家たちが連名の抗議文をフルシチョフらに送付したことは、それまでのソ連には存在しなかった新たな「学術共同体」が論争を通じて生み出されことを示していた¹¹⁷。

1960年代以降には、ヴォロブエフらかつて『歴史の諸問題』誌編集部と対立した歴史家たちが再びソ連史の再検討を目指し、「新志向」と呼ばれる動きを作り出した。ブルジャーロフは不遇にもかかわらず二月革命に関する2巻本のモノグラフを発表し、国内の学術誌では大きく取り上げられることはなかったものの、日本を含む海外で高く評価されてポーランドやアメリカでは翻訳が版を重ねた¹¹⁸。こうして「雪どけ」初期に『歴史の諸問題』誌編集部が目指した歴史の再検討は、1961年の第二次スターリン批判を経て、その後のペレストロイカ期の歴史の見直しへとつながる道を切り開いたのである。

(本稿の執筆に際して、科研費13J02402, 24242029の助成を受けた。)

1964-66年—『ロシア史研究』32号、1980年、和田春樹「転換するソ連歴史学 1968-70年」『社会科学研究』第37巻、第5号、1985年、富田武「スターリン批判再考—フルシチョフ改革とソ連社会—」『思想』11号、1986年、Markwick, R. D., *Rewriting History in Soviet Russia: The Politics of Revisionist Historiography, 1956-1974*, Palgrave, 2001, Tateishi, "Reframing the "History of the USSR", pp. 110-4, Matthew P. Gallagher, *The Soviet History of World War II: Myth, Memories, and Realities*, Greenwood Press, 1963, B. П. Булдаков. "Новое направление" в историографии (к 90-летию академика П. В. Волобуева) // Преподавание истории и обществознания в школе. №5. 2013などを参照。

116 A. C. Черняев. *Моя жизнь и мое время*. Москва, 1995. С. 224.

117 スターリン期とフルシチョフ期に当局へ送られた書簡の違いについては、河本和子『ソ連の民主主義と家族: 連邦家族基本法制定過程 1948-1968』有信堂高文社、2012年、231頁。

118 和田「エドゥアルド・ブルジャーロフ」、60頁。